

はくば 鳴 われ
 白馬のなくは我らが南無妙
 法蓮華経のこえなり。この
 こえ 聞 たも ぼんてん たいしゃく
 声をきかせ給う梵天・帝釈・
 にちがつ し てんとう いろ
 日月・四天王等、いかでか色
 増 光 盛
 をましひかりをさかんにな
 たま
 し給わざるべき、いかでか
 われ しゅ ご たま
 我らを守護し給わざるべき
 強 マ 思
 と、つよづよとおぼしめす
 べし。

(御書新版1447ページ・御書全集1065ページ)

通解

白馬がいなくのは我らが唱
 える南無妙法蓮華経の声である。
 この声を聞かれた大梵天王、帝
 しゃくてん にってん がってん してんのうとう
 釈天、日天、月天、四天王等が、
 どうして色つやを増し、輝きを
 かがや
 強くされないはずがあるうか、
 どうして我らを守護されないは
 ずがあるうかと、強く思われる
 べきである。

朗々たる題目で勝利の青春を

よくわかる解説

皆さんこんにちは、レオです！ 御書を学んで、ジメジメした空気を吹き飛ばそう☆

今回学ぶ「曾谷殿御返事」は、1279年(弘安2年)、日蓮大聖人がみぶ あらわ そや どうそう 身延で著され、曾谷道宗に送られたとされるお手紙です。

今回の御文では、「輪陀王と白馬」の故事が挙げられています。——輪陀王は、白馬のいななきを聞くことで生命力を高め、その力で国も栄えていました。この白馬は、白鳥を見て、いなないていたのですが、ある日、白鳥が突然いなくなり、白馬は鳴かなくなります。すると、王の生命力が弱まり、国は衰え、外国からの侵略も始まりました。しかし、仏法の祈りによって再び白鳥が現れ、その白鳥を見た白馬が喜びいなくのを聞いて、王は生命力を高め、国をも繁栄させた——というお話です。

この故事を通して大聖人は、白馬のいななきは南無妙法蓮華経の声であると教えられています。私た

ちが真剣に題目を唱える時、法華経の行者を守護する諸天善神の働きは強さを増し、自身の生命力を呼び覚ますことができるんだ。

ある未来部メンバーは、所属する野球部のチームワークに悩んでいた。その時、地区の方からこの御文を教わったんだ。それから、「自分の声で、現状を変える！」と決意し、毎朝の唱題に挑戦。一人一人の良いところを見つけ、前向きな声をかけていくと、ほかの部員も自然と声をかけ合うように。大会では、チーム一丸となって最高のプレーができたんだ。彼は、「自分の心からの声で周囲が味方になることを確信できた」と、当時を振り返っているよ。

池田先生は語っています。

「たとえ意味がわからなくとも、御本尊への勤行・唱題の声は、すべての仏・菩薩、諸天善神のもとに届いている。そして、目には見えないが、その人の願いを叶えるために、全宇宙が動いていくのです」

白馬がいなくように、朗々と題目の声を響かせて、勝利の青春を歩んでいこう！